

Welcome to the World!

10月6日

～出産前夜～ぼく、父親になります

明日、新しいひとつの命が始まる。ぼくとマミの娘（たぶん）である。

そして明日、ぼくも父親になる。生まれてこのかた29年間いろいろあったが、ひとの父親になるのは初めてだ。しかし、ひとりの人間をこの世に送り込むというのは大変なことだ。ぼくもマミ（ぼく的最愛の妻である。）もそしてこの世のすべての人々がこのプロセスを経てこの世界に登場してきているわけだから、やはり人の命は大切ってのもわかる気がする。

ちなみに、ここはロサンゼルス。アメリカ合衆国は国籍に関して属地主義を採用しているため、わが娘はアメリカ人になる。ぼくが今通っている大学の日本以外のアジアからの留学生ともだちからは、子供がアメリカ国籍を取得できることをたいそう羨ましがられた。ぼくは数十年先の日本も誇りと繁栄を享受する素敵な国になっていると信じて疑わないが、まあ、いずれにせよ、アメリカ国籍は我が子への良いプレゼントだろう。

明日、10月7日朝6時にマミはリトルカンパニーオブメアリーホスピタルに入院して計画出産と相成るわけだが、マミは十分落ち着いているものの、ぼくはどうも落ち着かない。既に、出産関係の書類は全て用意したし、命名式のときに飾る「優菜」という習字も十分練習してしまったので、文章でも書こうかというわけだ。

ちなみに、優菜という名は我ながら、いや、わが娘ながらか、いずれにせよ、とてもいい名だ。筆で何度も書いているとわかるが、「優しい」という字も「菜」という字もとてもほのぼのと優しく、かわいらしい。既に親ばかである。

さらにちなむと、ぼくは、嫁ばか（というのか。もしくは「親ばか」からの派生でいけば、「親」は「ばか」の主語になるわけだから、「夫ばか」というべきか。）でもあるのだが、母親とは偉大である。マミのことだ。これは決して、母親になったことによって、マミの全人格がいきなり成長して立派になるということではない（そう願いたいだが、むしろ妊婦という立場を乱用し気味ともとれる傍若無人な行動は多々ある）。マミの母親としての部分がということだ（なんとも言うようにまだ産んでないけど）。明日ぼくも出産に立ち会うわけで、ぼくもぼくなりには出産のイメージトレーニングをしてみるのだが、とても耐えられそうにない。マタニティークラスなどで出産のビデオを見せつけられるにつけ、本気でぼ

くを男に産んでくれた両親に感謝している。が、しかし、マミは明日その大事業が待ち構えているというのに、横綱朝昇龍のように泰然と構えている。なお、見ようによっては浜に打ち上げられたアザラシのようにも見えなくもないが。いずれにせよ、母親とは偉大である。

さて、いちおう、わが子がマミの体内に宿ってからのこれまでの記憶と感情を綴っておこうというのがこの文章の趣旨だ。

～始まりの始まり～予定通りというか、そうじゃないというか

マミの体内におけるわが子の生成が発覚したのは2004年2月だった。2004年7月からぼくが2年間、アメリカ留学するのが決まっていたので、その2年間をマミの産休+育児休暇(=3年以上。マミはいわゆるスチュワーデスなので航空会社勤務。航空会社の福利厚生の重厚さには驚かされる。)にちょうどあてがって二人で渡米しようと目論み、子作り大作戦を執行していたところだった。が、子供というのはそう簡単にできるものではない。このため、妊娠も確率論だから、狙いをさだめるべく、子作り大作戦の一時停止をしていた時期だった。つまり、この月には、世間一般に信じられている妊娠しやすい時期に、子作りの行為をしていなかったわけで、まさに寝耳に水であった。

それは、マミの実家のある愛媛への里帰りから東京に戻ってきた日、羽田からの京急線の中だった。マミから、「もしかして妊娠したかも」的な発言があったのだが、上記のように子育て大作戦は停止中だったわけだから、にわかには信じられなかった。その日は平日だったため、マミには家にかえって検査薬で調べて、連絡をくれるように言ったうえで、ぼくは羽田から直接職場へ向った。昼前にはマミから電話があり、「やはり当たっていた」と。

今から思えばこの電話を受けたときが、自分がひとの父親になることの最初の報告だったのだが、ほとんど実感はわからず、ただはしゃぐばかりだった。しかも繊細な女心のわからない無神経なぼくは、無邪気に喜んで「んじゃ、午後病院行ってきなよー」と言い放って電話を切った。

しかし、その後愛媛にいる義母に電話すると「こういうときは不安だから一緒に病院行ってあげて」という。そういえばたしかにさっきの電話でのマミはやや不安そうだった。さすが母親だ。さっそく仕事を早退させてもらい、一緒に病院に行くことにした。やはり一緒に病院に行ってよかった。マミを安心させてあげられたことに加えて、超音波の映像

にしても、初めてのわが子の姿をふたり一緒に確認できたのだから。

この日はとにかくうれしかった。じつは、当初計画では4-6月くらいに妊娠するという絵を描いていた。当初計画より開始が3ヶ月ほど早まったため、いくつかのデメリットはあった。マミの仕事に関してである。彼女の仕事は、いわゆるスチュワーデスなので、フライトによる胎児への影響を避けるために妊娠発覚直後から産休に入らなければならない。このため、マミは明日から専業妊婦（せんぎょうニンプ）になるわけである。これによって、4月に控えていた「check」という、たぶん航空会社で正社員になるための関門のテストみたいなものが受けられなくなること、また、同じく4月に控えていた、JALとの合併による新しい制服が着られなくなること、などである。さらに、我が家の稼ぎ頭（涙。。）のマミの収入がなくなるわけだから、この経済的損失もかなりばかにならない。「そのくらい大丈夫だよ」とさらっと言えるような稼ぎがぼくにあれば良いが、しがない公務員の身ではそんな大言壮語は吐けないというものだ。

まさに青天の霹靂で、いきなりマミから仕事を一時的とはいえ取り上げてしまったのは、心苦しい面もあり、この日のマミの不安な面持ちのうちの何割かは、それらが原因らしいので、申し訳ないような感じもするが、新しい命が生まれるのにそんな気持ちを持っていたら、わが子がかawaiiそうだと思直して、前向き思考に切り替えたりしたのであった。いずれにせよ、これから始まる大事業を前にしては、たいした問題ではないのだ。

～日本でのこと～マミの決意に背中を押されて

マミも母子手帳や育児日記に日記を書いているので、日本でのことはややしよることにしよう。

ゴールデンウィークに日本最後の（といっても留学は2年間だけだが）里帰りということで愛媛に帰った。このとき、まだマミの出産、いや、マミの、というよりぼくたちの出産を日本でするか、アメリカでするかは決めていなかった。ただ、マミが強硬に、ぼくとの同時渡米及び米国における出産を主張していたのだ。通常、海外赴任する場合、夫が先に行って生活のセットアップをし、妻や子供が後からついてくるものだ。いわんや、出産となると、赴任中に妊娠した場合でも日本での里帰り出産が主流だ。

ぼくとしては、こういうとやや投げやりな感じがするが、まあ、マミのしたいようにしてくれば良いと思っていた。が、異国の地での、言葉も通じないところでの出産に大いなる不安はあった。さらに、渡米して間もない出産になるため、自分自身もまだ慣れていないのに、出産という大仕事を乗り切れるか、という不安もあり、どちらかといえば、一

一般的な日本での出産をイメージしていた。

そんな中、ぼくと義父、義弟、知人と話すなかで、「やっぱりマミは里帰り出産すべきじゃないか」ということで意見が全会一致したのだった。それもそうだ。やはりぼくの持っていた不安はみんなが共有する、というよりもむしろマミの親としてはぼく以上に心配することなのだ。ということで、「よし、家に帰ったらマミを説得しよう」ということになった。

さて、誰がマミを説得するかが問題である。自分の妻の気性を知っているぼくは、自分には到底無理だと即時に判断した。このため、先制攻撃で、上記発言が義父からあった直後に「ですよー。お父さん、マミの説得お願いしますよ！！」と義父にこの困難な仕事を丸投げしたのだ。

帰宅後、唐突に義父がマミを説得にかかった。これに対し、マミは目に涙を浮かべつつ、断固拒否。娘の泣き顔に困惑した義父もたじたじで、この場の空気を解読すると、あきらかにマミの完全勝利だった。あとから聞けば、アメリカで出産したいという理由はただひとつ、ぼくと離れたくないからだという。これにはぐっと来てしまった。そんなマミの気持ちを受けては、もうアメリカでの出産に決めない手はない。さらにマミは、「いろいろ大変そうだけど、後から笑い話になりそうじゃん」という。やはり母は偉大である。ちなみに、マミのこの樂觀の内には「英語とか、面倒くさい手続きとかは全部和也君（＝ぼく）がやってくれるんでしょ」という、ぼくへ丸投げの前提が含まれているのだが、そのときのぼくはただただ感心していた。

～アメリカでのこと～この国、なにが起こるかほんとわかりません

7月11日、結局ぼくは身重のマミと一緒にロサンジェルス国際空港に降り立っていた。はっきりいって英語はできるほうではない。かつ、外人恐怖症の妊婦であるマミを連れていく。我が社は、国のために異国の地に留学に行く若人に対して、妻の飛行機代も出してくれないし、別送荷物代も出してくれないので、傍らにはスーツケースが5つとダンボールが1つある。これで不安でない人間がいるわけがない。

が、「案ずるより生むが安し」というのは本当で、だいたいは勢いで乗り切ることができた。

さて、病院探した。当初の不安に反して、ロスは外国ではなく、言うなれば東京第24区だった。ここでは、渋谷を徘徊している女子高生でもふつーに生活していけそうなほど、

日本が行き渡っている。とりあえず日本語の電話帳を入手し、日本語のできる医者をもミがピックアップ。電話してみる。が、相手は英語だった。慣れない英語で、しかも電話だと、トフル（※米国に留学する際に必要な英語の試験。）のリスニングの3倍くらい難しい。が、これもなんとか勢いで乗り切りつつ、ドクタールーという、チャイニーズ系の先生に行き当たった。ドクタールーは、ロスで生活する日本人向けのホームページで、日本語で出産アドバイスを書いていたのをミが見つめてきたのだ。さっそく電話すると、スタッフも日本語を話せるではないか。ばっちりだ。

ちなみに、アメリカ出産でよかったことの最大のものは、お金の問題だ。アメリカはいか減なお国柄というか、おおらかなお国柄というか、既に妊娠7ヶ月のミの出産費用を、大学の保険でカバーしてくれるという（ただし10万負担）。日本の保険会社だと、加入時に妊娠していなくても、出産費用をカバーする保険はない。キャッシュアウトがほぼ100万あるわけだから、保険のビジネスとして成り立たないから、出産は保険の範囲外というのが当然な気がするが、なぜかぼくの行く大学の保険は大丈夫だった。アメリカとはおおらかな国である。

また、こちらでは、産婦人科医は、それぞれ自分のオフィスを持っているが、施設はもっておらず、検診は医者のオフィスに行くが、出産は大病院で行うというのが普通らしい。うちも、検診はドクタールーのオフィスに行き、出産はリトルカンパニーオブメアリーホスピタルという大病院だった。

閑話休題。ルーのオフィスに行った。事務のスタッフさんたちは日本人。いい感じだ。ドクタールーも当然日本語しゃべれるんだよね、と思いつつ、しかし、名前が日本名じゃないからやはり一応確認しとかなきゃいけない。

ぼく：「ドクタールーも日本語しゃべれるんですよね？」。

事務の人：「いえ、しゃべれませんよ。」

やはりアメリカは怖い。これは詐欺か？だって日本語でホームページに解説書いてたじゃん（涙）。が、いまさら病院変えるわけにもいかない。しかも続けて事務の人は「旦那様は英語は大丈夫ですよ？」と。

そう聞かれると、見栄っ張りのぼくとしては、

「ええ。まあ。」

と答えてしまった。条件反射だ（笑）。わが子の出産に関する大事な局面だ。身を捨てて

も実をとらなければならない。が、身を捨てられなかったわけだから、身を捨てずに実も取るためのリカバーをしなければならない。

「いや、でも、出産の専門用語とかわかんないかも。通訳していただけます？」

我ながらナイスリカバリーである。

ドクタールーは、英語もわかりやすいし、概して良いやつだった。

～食事制限のこと～妊婦の扱いの勝手も違います

アメリカ人には肥満が多い。とにかく、熊みたいな巨大な人間が街中を闊歩している。ほんとにすごい国だ。こっちに来て納得したことのひとつが、不思議の国のアリスに出てくるハンプティダンプティ。あんな卵に手足がくっついたキャラをどうして想像できたのだろう、と子供のころ思っていたが、実際に、ここにはそんな巨大な人間がたくさんいる。

しかし、だ。白人の赤ちゃんはちっちゃい。すこぶるかわいい。日本人の平均的な赤ちゃんよりもちいちゃいらしい。逆に、日本人女性の骨盤とかは、白人女性に比べて勿論小さい。このため、この地の産婦人科医は、体の小さいアジア人に大きな赤ちゃんを産ませるリスクを回避するため、なるべく赤ちゃんを小さく産まそうとする。ドクタールーにはその傾向が顕著なようだった。いわく、「赤ちゃんが大きすぎるから、ライスやパスタやポテトやコーンや、、、とにかく炭水化物は一切とるな！！でないと帝王切開でおなか切っちゃうぞ。」と。

異国の地での出産でやはり身構えているマミは、このドクターの忠告に忠実に従い、その日からノーカーボ（炭水化物なし）な食生活を送った。肉と野菜しかだめらしい。当然ケーキとかアイスとか、そういう甘いものもダメなわけで、あと、そば関係やごはん関係者も我が家の食卓からは退場願った。あとは、ドクタールーがアメリカらしく（らしいのかよくわからないが）、いろいろなサプリメントを薦めてくるので、赤ちゃんの目と脳にいいという魚の油のサプリなんかを一日数個食べていた。

しかし、ずっと炭水化物断ちをしていると、日本人として、いや、人として本当にこれでいいのか？という疑問がわいてくるものだ。家庭科の先生をしているおともだちの礼子さんも、そんなに炭水化物を断つのは健康によくないと言っていた。マタニティークラスで会ったおともだちもドクタールーにかかっているというが、彼女もノーカーボを言い渡

されたが、余裕で食べているらしい。やはりドクタールーは、赤ん坊の体内での過度の成長を避けるべく、すべての患者（とくに日本人）に似たようなことを言っているらしいのだ。

ここはアメリカだ。ルーも、自分のリスクをなるべく回避すべく、赤ちゃんをちいちゃくまとめようとしているに違いない！まったく、この国ではうかつに人を信用するとこっちが痛い目にあう！（※）

というわけで、その後は少しずつ、炭水化物を復活させたのだった。

（※本当はドクタールーはとてもまじめでよい人だったが、ぼくらの勢いとしてはこんな感じでノーカーボを辞めたということ。）

最も興味深かったマミの行動は、マミは、どうも、検査でやや糖尿っぽい値がでたため、素直に医者ということに従うことにしたらしいが、出産日の10日前に最後の検診が終わると、炭水化物どころか、それまで厳禁だった甘いものを誰にはばかることなく食べ始めた。赤ちゃんにどうというよりも、「もう検診ないから先生になにも言われなくても一ん」ということらしい。現金なものだが、まあいいか。

～名前のこと～わが子にアメリカンネームをあげよう

日本を出る前から、うちの子は女の子とわかっていたので、名前は「優菜」に決めていた。ちなみに、男だったら「隆之介」だ。ロサンジェルスに来て、ドクタールーも「still girl(まだ女の子だよ)」と言っていた。日米両国での見立てが一致しているわけだから、おそらくうちの子は優菜ちゃん間違いなさそうだ。

問題はミドルネームだ。アメリカでの出産のメリットのうち、ミドルネームを付けてあげられるというのは、大きい。自分の身に置き換えても、学校で、また、大人になってからの飲み会の席で、「おれ実はDavidっていう名前持ってるんだ」なんて言えたら、面白いじゃないか。まあ女の子の場合にどうなのかは知らないが、とにかく良い。

我が子のアメリカンネームに関しては、日本語名っぽくもある名前、という条件で検索し、いくつかの案が浮上した。

最初は、病院もリトルメアリー病院だし、「メアリー」は？という説が有力説だったが、メアリーというのはどうも日本語のイメージだと「花子」とか「太郎」といった古典的な名前だということで、とりあえず、却下。その後、マミが声高に唱えた「クリスティーヌ」とか、ロサンジェルスだし、エンジェルの的なのは？ということで、まんま「エンジェル」

とか、やや派生して「アンジェラ」とかが来た。天使にはやや詳しいぼくである。どうせなら天使の名前から取ろうと思い、「ガブリエル」、「ラファエル」、「ウリエル」、「ミカエル」（いわゆる 4 大天使）ときて、ミカエルの女の子読みの「ミシェル」は？というのと、マミは「ミシェルというのは男だとマイケルだから嫌だ」という。よくわからないがとにかく嫌らしい。

ではどうするか。ぼくの好きな天使は、実は「ルシファー」だ。音も良いし、ミカエルたちが天使の最下層の大天使（アークエンジェル）に過ぎないのに対し、ルシファーは天使でもっとも階級が高い熾天使（セラフィム）だ。しかし、問題は、ルシファー君は、墮天使なのだ。墮天使というとちょっと歌の歌詞にでも出てきそうで（とくに氷室狂介の昔の歌に出てきそう）、まあ、ちょっと悪戯っぽい感じだけどまあいいんじゃない的に聞こえるかもしれないが、墮天使とは、悪魔である。ルシファーは、天界で神に対して氾濫を起こして神に戦いを挑み、墮ちてサタンになってしまった張本人である。ちょっと前に自分のこどもに「悪魔」という名前を付けて、役所で受理されなかった事件があったと記憶しているが、それにやや通じるところがあるではないか。わが子にそんな名前を付けるわけにはいかない。

が裏を返せば、ルシファーの氾濫の原因は「奢り」であり、それを戒める意味でも、また、天使時代のルシファーにあやかる意味でも、こいつから名前を取るのはいいかも知らない。ということで、「ルシファー」もしくは「ルーシー」説が我が家では一時最有力となった。

しかし、どうも音にいまひとつ納得がいかない。そんなとき、満月の夜が来た。マミのおともだちの韓国の人々が、満月の夜の祭りで、「ルナカレンダー」の話をしていたらしい。そこでピンときて、「ルナ」という名前に行き着いた。「月」、もしくは「月の女神」である。音も良い。しかも音が「優菜（ユーナ）」に近い。とても素敵な名前である。「羊の夜をビールで洗う・ルナルナ」というスピッツの歌もある。さらにいえば、ユーナというのは気縄の方言で夕（ゆう）、夜に通じ、ルナ＝月とあいまって、「夜をやさしく照らす月」というような、素敵なイメージにもつながるし。

ま、以上のような経緯から、わが娘のミドルネームは「Luna」に決まったのであった。

～計画出産のこと～わが子の誕生日を自分で決める

さて、うちの子は計画出産でこの世界にデビューすることになる。妊娠 35 週の検診のときに、ドクタールーから「君たちの子供は非常に成長が早い。あまり大きくなりすぎると

帝王切開の危険性もあるから、早く産んだほうが良い。とくに頭が大きくて、頭だけもう40週の大きさだよ。9月27日以降は、いつでも産めるから、いつ産みたいか考えておいてくれ」と告知された。日本人看護婦さんに聞くと、どうもこっちは計画出産が主流らしい。

そこで、夫婦ふたりで、わが子の誕生日をいつにするか相談した。誕生日を人工的に決めるのもやや気が引けるが、まあ、いいだろう。ぼくの誕生日が9月9日のゾロ目だから、というしょうもない理由で、10月10日は？と提案すると、マミも素直に賛同してくれた。10月10日は元体育の日だし、健康な子供が育ちそうではないか。しかも、もともと体育の日というのは東京オリンピックの開会式の日で、なぜ10月10日が開会式に選ばれたかという、気象庁の過去のお天気データから、10月10日はもっとも晴天確率が高いからである。わが子の誕生日が曇ひとつない晴天というのは、最高じゃないか。ということで（っていってもロサンゼルスは毎日毎日太陽がさんさんと輝く晴天続きではあるが）、この日をわが子の誕生日にしようと決めた。

次の検診のとき、ドクタールーに「この前言っていた出産の日だけど、10月10日がいいんだけど」と言ってみると、「いや、10月7日までに産もう」という。

「あれ？いつ生みたいか考えておけっていったじゃん？？なんで7日までになんだよ？」との疑問がわきつつも、それらに関してディスカッションする英語力に自信がなかったので、まあ、なんとなく医学的判断なのかなと自分を納得させて、その日は引き下がった。

9月27日、この日が最後の検診になったのだが、このとき、ドクタールーは、「もう子宮口が3センチ開いています」「ふつーならもう陣痛始まっているよ。ほんとに陣痛ないの？」という。さらに、あろうことか、「赤ちゃんの頭がもうすぐそこまで来ています」と。ということは、ドクタールーは、父親であるぼくがわが子の頭を触る前にうちの娘の頭を、たとえ羊水越しにせよ、さわったというのか？やや憤慨したが、よく考えれば、生まれるときもドクターに取り上げてもらうわけだから、ここは寛大な父親らしく我慢しよう（笑）。

つづけて、「10月7日の朝6時に病院に予約入れてあるから、もしそれまでに陣痛が来なかったら、その日に病院に来てください」と。

「・・・」

「出産日は自分で決めろって言ったのに、お前が決めんのかよっ」と突っ込みたくなる衝動をギリギリ抑えた。しかも、なぜ朝6時なのか。木曜朝6時って、週末仕事したくありませんということか？

しかし、わが子の出産が目前せまり、今日明日にも陣痛がはじまるかもしれないという

状況で、人並みに、もしくは人並み以上に焦りと興奮を覚えていたぼくは、医者 of 言うことを素直に受け入れて「I see (わかったよ)」といていた。

～出産直前のこと～わが子はまだか！

最後の検診が終わって数日後、9月29日、トイレから出たマミは、「和也君、たいへん、血が混じってるよ！」という。いわゆる「おしるし」かもしれない。数多購入した妊娠マニュアルによると、おしるしが出てから一両日中に陣痛が来る妊婦が多いらしい。マミの場合、子宮口は既に3センチ開いているし、子宮が収縮するような鈍い痛みもあるらしい。これもいわゆる「前駆陣痛」というやつだろう。これはおおごとである。とりあえず愛媛にいる義母に電話。続けている人々に電話。マミに言わせると、ぼくはひとりで焦っていたらしいが、ぼくとしては、焦っていたのではなく、われわれ夫婦の一大事業を目前にして、思う存分にはしゃいでいたのである。

しかし今や10月6日である。この一週間、今日か今日かと毎日どきどきしてきたが、結局明日をむかえることになった。家族やともだちやいろんな人が、まだかまだかと心配してくれているというのに、当の本人はまだおなかの中が心地よいらしく、元気に動きまわっている（出産直前になると、胎動が減るらしいので、お腹の中で元気に動き回っているということは、出産はまだだということだ）。まったく人騒がせな子供だ。正確に言うと、人を騒がせたのはぼくだが。

もう12時を回った。10月7日だ。明日は朝が早い。あと4時間後には起きている。今日はさすがにマミもやや緊張していた感じもあるが、やはりぼくよりは数段落ち着いている。ぼくも明日に備えてもう寝ます。おやすみなさい。

10月7日 優菜誕生の日

AM 4:00 夜明け前

目覚ましは鳴るのがしっかり聞こえた。というのも、結局昨夜は眠れていない。朝6時に病院に予約が入っている。家から車で5分足らずだから、家を5時45分に出れば間に合うだろう。

義母が作ってくれた朝ごはんを食べる。「今日はこれから食べられなくなるからたくさん食べておいたほうがいいよ」とマミに言われて、白米を3杯も食べてしまったため、午前中いっぱい胸やけがした。マミは昨夜もちゃんと寝、納豆で白米を2杯。

出発前に日本にいる家族に電話した。病院までは、マミが運転することに。ぼくは助手席でビデオを回した。外はまだ暗い。マミは本当にリラックスしていて心強い。マミもぼくがいて心強いと思ってきているだろうか。たぶん、そうだろう。でも、わが子を産んでくれるマミがちゃんとしていることをぼくのほうが心強いと思うのだった。

AM 6:00 病院到着

病院に到着した。ホテルのような豪華な病院で、正面玄関には噴水、教会、ロビーに入ると、ピアノがあってギフトショップがあって、フロントがあって、素敵だが、今はそういうことたちは興味に入らない。素通りして3階の産婦人科へ。

受付で名前を告げると、すぐに病室へ。

この病室がこれまた広くて綺麗。涼子が出産した山王病院も綺麗だったけど、まったく引けをとらない。が、再度、今はそういうことたちは興味に入らない。

到着後、最初はペーパーワークと、諸々の説明があり、その後6時30分から、いきなり点滴が始まった。もはや観念しているが、やや計算違いだったのは、せつかく日本語の通じる産婦人科を選んでも、いざ、出産のときは、病院の看護スタッフたちが観てくれて、医師は最後に取り出すだけ（実際はドクタールーはけっこう頻繁に足を運んでくれたが）。オフィスの日本人スタッフなどはまったく関係ない。結局、この日のぼくらの出産はすべて英語の海外出産だった。

この点滴も、3種類の薬を投与しているが、一つがブドウ糖などの栄養。これから赤ちゃんが出てくるまで、マミはいっさい食べられないからだ。もうひとつが抗生物質。赤ちゃんを子宮外のばい菌たちからまもるため。そして早くも陣痛誘発剤の投与。

これらの薬について、看護婦さんが説明しているのだが、そんな専門用語がわかるはずがない。最初は、点滴を示す「IV」というのがわからず、看護婦に『『アイビー』って何？電子辞書で調べるからスペル教えて』と聞くと、看護婦的には『『IV』って、まんまスペルじゃん??』とでも思ったのか、怪訝そうな顔をしていて、うまくコミュニケーションできない。でも、まあ、なんとか一歩ずつ前に進む。今日一日、意外とびっくりしたのは、マミもちゃんと聞き取って理解していることだ。けっこう出産の後期になっても、また、うまれた後の看護婦さんからの説明なども、ちゃんと理解している。これも母の力か。

たまひよ（たまごクラブひよこクラブ）の「出産&新生児大百科」に記載されている出産体験記によると、陣痛誘発剤を投与してから数分するとかなり激しい痛みが始まったとあった。しかし、この国ではそこも勝手が違うのか、マミに変化の兆候はほとんどない。テレビをつけた。LAでは地上波で日本の番組が少しだけ流れているので、それらを見た。7時から「特ダネ」、7時30分からNHKの朝ドラ「私の青空」（古すぎる!）、その後「3分クッキング」（ちなみに、なぜこれらが、数少ない貴重な日本語枠の番組に選ばれているのか今もって理解できない）。マミはまだまだ余裕だ。

AM 8:15 ドクター登場

8時に看護婦さんがミシェルに交代した。この日、何人も何人も看護婦さんが交代でぼくらの出産を見てくれた。ミシェルは、早口なため、聞き取りがやや不安だったが、なんとかあった。

8時15分にドクター一登場。陣痛を促進するために、人口破水させるという。どんな手術かと思いきや、プラスチック製の割り箸みたいな棒で、先っちょが釣り針のようになっているものを膣内に入れて、羊膜を破るだけ。先が釣り針のように弧になっていて、とがっている部分は胎児に当たらないようになっていた。

破水させることによって、陣痛が促されるという。すぐに羊水が出てきた。羊水は膣内を潤して、赤ちゃんが産道を通るときにスムーズに通れるようにする働きもあるという。「じゃあこんなに早く破水させていいもんだらうか?」とも思うが、24時間程度まで問題ないらしい。いずれにせよ、これで、マミに陣痛というものすごい痛みの波が訪れるのだろうか。

AM 8:30 4度目のトイレ～初めての陣痛?

マミはベッドに横たわり、下腹部にセンサーをつけ、赤ちゃんの心音をモニタリングし

ている。さらに、子宮上部に筋肉の収縮を測るセンサーをつけ、モニターで視覚的に陣痛の波を捕らえることができるようにしている。また、腕には血圧測定器がつけられ、20分に一度自動的に母体の血圧が測られる。

が、左手首から点滴しているので、トイレが近い。そのたびにぼくが器具類を手順どおりに取り外し、トイレに連れて行くのだが、4回目となる今回は、破水後だったため、トイレで羊水が床にたくさんこぼれてしまった。ベッドに戻っても、羊水はあふれ出てくる。とりあえずトイレの床をきれいにふき取った。ふき取ったナプキンをトイレに流したら詰まってしまい、回復にややてこずった。ぼくがトイレの容器内に手を突っ込んで詰まったナプキンを取り除いていると、8時35分、マミに陣痛らしき軽い痛みの波がやってきたようだ。痛みはそれほど感じないらしいが、モニターで視覚的にわかるので、いちおう来ていることがわかる。1-2分おきに30-40秒の陣痛の小波がこの後2時間以上続いた。

AM9:00 看護婦さん交代 ミシェル→キャシー

AM9:43 一本目の陣痛誘発剤が空に

一本目の陣痛誘発剤が空になったため、キャシーに電話すると、他の看護婦さんが来た。この人が日本好きらしく、私は日本のどこどこに行ったことある、とか、どこから来たの？とか、ぼくの大学のこととか、赤ちゃんは最初？とか、まあアメリカに来たばかりの日本人との会話の定型パターンな話を10分くらいしていった。ぼくは、「マミが陣痛でうーうー言ってるのに、こんな決まりきった世間話をこの人はいつまで続けるんだ？」とやや苛立っていたが、マミに聞くと「英会話していると聞き取りに集中しなきゃいけないから、痛みが和らぐよ」という。

なんと英会話は陣痛緩和に効果を発揮することが発覚したのだった。

AM10:25 看護婦さん交代 キャシー→アイリス

マミはまだまだ余裕だ。今日は朝4時半にご飯を食べたので、ぼくはお腹がすいてきていた。義母は、異国の地での娘の出産に立ち会うために心身ともに疲労困憊で（義母も自分以外の人のお産に立ち会うのは初めてだといって緊張していた）、食欲はわからないらしく、結局この日一日を通してバナナ一本しかたべなかったが、ぼくは食欲だけは通常通りだ。ぼくと義母で1階のカフェテリアに昼食を買いに行った。サンドイッチを2つ購入。

部屋に戻ってみると、新しい看護婦さんアイリスと、それからジャパニーズオフィスの

きよさんがいた。きよさんによると、この前、陣痛促進剤で出産した人がいたが、その人も、午前中そんなに強い陣痛は着いていなかったのに、午後の早い時間に出産したという。Good News だ。もしかして午後すぐに赤ちゃんに会えるかもしれない。とにかく「早く会いたい」という気持ちがこみ上げてくる。昨日までは、「早く生まれなかなあ」というやや具体性が少ない気持ちだったが、いざ当日になると、あと数時間後に自分の目の前に赤ちゃんがいることになるわけで、赤ちゃんが「会う」対象の一人の人間として想起できるようになっていた。

AM11:50 子宮口チェック

アイリスは、この日マミにもっとも長い時間ついていてくれた看護婦さんだ。11時50分に、彼女がマミの子宮口の検査をした。

子宮口5センチ

なかなかいい進み具合だ。アイリスは「半分まで来たよ。赤ちゃんがまだ正しい方向を向いてないから、もうちょっとがんばってね」という。このまま順調に行って欲しい。子宮口のチェックは、看護婦もしくは医師が膣内に指をつっこんで計る。マミには見えないが、指を出すと同時に、ドローっとした半透明の血が比較的大量に出てくる。初めて見たのでびっくりしたぼくは、マミをショックさせないように、こっそり義母に「あの血は普通なんですかね？」と聞くと、どうも普通らしい。安堵したが、心配させないために、マミには血が大量に出ていることは言わないでおいた。

AM 11:55 昼食が運ばれてくる

このときはマミの痛みもまだ強力ではなく、自分が食べられない昼食を運ばれて、それを目の前で食べるぼくに対し、「食べ物うらみは怖いよー」などと冗談を言っていた。しかし、ぼくがそのたいしてうまくもない昼食を、さっきのサンドイッチを2つ平らげた後にもかかわらず5分で片付けた後に、状況は一変する。

だいぶ痛みが強くなってきた。それまでは、陣痛が来ると「いーたい♪、いーたーい♪」と節をつけて気を紛らわす感じだったが、このときは「いったーっ」と低い声で叫ぶ。1-2分間隔で1分程度の陣痛が襲ってくる。そろそろ本番だ。

AM 12:10 陣痛本番

15分もすると、マミもだいぶ「怒って」きた。陣痛が始まると、「痛ったい、も一つっ」と怒声を発する。これぞ、マタニティークラスで習った「ハリス式」呼吸の出番だ。立会い出産中なにもできない夫の唯一の出番である。

「はい、ゆっくり呼吸して」とぼく。すると、「そんなの絶対無理。意味ないよっ。」とマミ。

ハリス式では子宮口全開大までの間、コーチ役の夫が妻をさすったりしろという。それに従ってマミの背中をさすと、「触らないで、お願い」とマミ。

さらには、右腕につけていた、血圧測定器をビリビリっと豪快に取り外して傍らに投げ、「こんなのやってられないっ」

大変だ。

後から振り返ってみると、この陣痛第1期（子宮口5センチ→8センチ）は、第2期（8センチ→全開大）までに比べると、かわいいものだったみたいだが、初めての二人にとっては、こりゃ大変だ。

気を取り直して、マミにゆっくり呼吸を呼びかけると、マミも従い始める。陣痛の合間に「やっぱこの呼吸法いいね。」という。痛みが和らぐ感じがするらしい。しかし、この呼吸法が出来たのはこの短い数分だけだった。

ちなみに、後から書くが、ぼくらの出産のクライマックスのときに（3時30分）、ジャパソオフィスのきよさんが登場した際、マミにゆっくり呼吸をやさしく指示してくれた。ぼくなんかとは違い、熟練のきよさんの指示にマミも従うと、だいぶ気持ちが楽になったらしい。産後、マミも「ハリス式いいよ。マミには無理だけど」と。

これを読む未来の父親候補諸兄たちには、是非、落ち着いてパートナーの陣痛を和らげてあげて欲しい。

一方で、そんな技術のないぼくは、ひたすらマミの手を握って、マミの名前を呼び、「がんばれ、もうちょっとだよ」と大声で一生懸命に呼びかけ続けた。

AM 12:45 「ヒッヒッヒッファー」

1、2分ごとの1分間の陣痛の波。妊婦は温度変化が激しいらしい。「暑いっ」といった2分後には「寒いっ」といい、そのまた2分後に「暑いっ」という。そのたびにぼくがエアコンを調整する。このときのマミは、自分の人使いの荒さを詫びてぼくに「わりーねっ」

という余裕が若干残っていたようだ。

しかし陣痛は、その強さを順調に増していく。見かねたアイリスが、マミに痛みのやり方方を教えてくれる。

「痛みに神経を集中させないように壁の絵などを見なさい。」

「呼吸法は、『ヒッヒッヒッフー』よ。」

ちなみに、「ヒッヒッヒッフー」は全部息を吐くらしい。普通のぼくなら、「いつ吸うねんっ」と即座につっこむところだが、嫁の惨状を前に、そういう思考回路は働かない。とにかく、全部吐くということらしい。マミ的には、前述の英会話効果で陣痛緩和にやや役立ったみたいだが、全部聞き終わった後に日本語でぼそっと言った。

「わかるけど、でもそんなのできないよ。。」

しかし、この後の出産過程で、マミは必死で「ヒッヒッヒッフー」の呼吸を続けた。

PM 1:07 過呼吸

陣痛のときにあまりにたくさんの酸素を吸ってしまうため、マミは過呼吸に陥り、手先がしびれてきてしまった。このため、紙袋を用意し、陣痛の合間には紙袋を口に当てて呼吸。なるべく酸素を多く吸いすぎないようにした。このころ、痛みの感覚は1分おきくらい、強さもさらに激しくなっており、なにもできないこちらとしては非常に辛い。陣痛が来るたびに、大声で、

「マミ、がんばれっ。もうちょっとだよ。」

「ヒッヒッヒッフー」

を繰り返した。

PM 1:15 まだ5センチ

アイリスが再び膣内に手を入れて、子宮口を計る。しかし「まだ5センチ」だという。約1時間半前に既に5センチだったのに、まだ同じだという。この1時間半、マミはこれだけ苦しんだのに。怒りにも似た感情がこみ上げてくるが、ぶつける相手がいない。アイリスは、硬膜外麻酔（無痛分娩）の提案をしてきた。

もともと、ぼくは無痛分娩でもいいのではないかとマミには話していた。しかし、マミは、麻酔をするのはいやだと言って、普通分娩でいくと主張していた。このとき、マミに「どうする？」と聞くと、マミは「いやだ」とは言わなかった。が、「麻酔する」とも言わなかった。このため、ぼくはアイリスに「彼女は麻酔はしたくないといっている。もうちょっと時間をくれ」と通訳した。

PM 1:30 ドクタールー再登場。やはり硬膜外麻酔か

15分後、ふたたびドクタールーが登場。ルーいわく、「まだ子宮口が5センチなのは、痛みで筋肉が緊張しているためかもしれない。硬膜外麻酔をすると、筋肉が和らいで出産がスムーズに進む可能性がある」という。

マミにも通訳したが、いまだ決心はつかない。

PM 1:50 ドクタールー再び

ルーがまた来た。いわく、「今から子宮口をチェックしてみるが、まだ5センチだったら、硬膜外麻酔にすることを薦める。もし、もっと開いていたら、順調なので、このままでも大丈夫だろう」と。ぼくとしては、マミの意思に反して麻酔を打つのは避けたかった。どきどきしながら結果を待つ。

「今、子宮口は6センチになっている。Goodだ。今が一番辛いときだから、がんばって。あと1時間くらいで赤ちゃんに会えるかもしれないよ」

良かった。あと1時間ならがんばれる。がんばれ、マミ。

PM 2:11 子宮口8センチ

アイリスが子宮口をチェック。子宮口チェックは、お産の進捗がわかるので、非常にうれしいのだが、マミは膣内に強い痛みを感じるらしい。チェックのたびにあれだけの血が出ているのだから、痛くもあろう。今回のチェックのときは、陣痛で疲れてきていることもあり、手を入れられたときにマミは大きな声で「痛い——！！」と叫ぶ。

しかし、結果はうれしいものだった。子宮口が8センチまで開いていた。

「マミ、もうちょっとだよ。がんばろう」

しかし、じつはここからが。ここからがこの出産の最大の難所の始まりだった。

PM 2:20 子宮口チェック再び

前の子宮口チェックから 10 分後に再度アイリスが子宮口をチェックするという。これはいい兆候だ。それだけ進捗が早いと看護婦さんが判断しているということだろう。赤ちゃんに会えるのももうすぐかもしれない。

しかし、結果はまだ 8 センチだった。

ここからが、長い。この後 1 時間、最高潮の陣痛が 1 分ごとに襲い続ける。しかし、アイリスは子宮口チェックをしようとしな。い。わ。く、「8 センチから全開大は赤ちゃんの向きの問題だけなのよ。赤ちゃんがまだ背中を向けてないから」

マミは限界に近い。陣痛が来るたびに、ぼくの手や肩に跡が残るくらい強い力でつかみかかり、「まだ？」と叫ぶ。ぼくと義母は、マミの背中を押してあげながら、「がんばれ。もうちょっとだよ。」と励ます。

しかし、ほんとにもうちょっとなのか？いつ終わるかわからない痛みを耐える、いや、耐え切れないマミを目前にし、その痛みを感じることは出来ない辛い時間が経過していく。いや、時間はなかなか経過してくれない。マミがひとつの激痛の波を乗り越っても、1 分しか経過してくれないのだ。

陣痛の合間、放心状態のマミは、過呼吸のため、紙袋を口に押し当てて呼吸をしながら、にらみつけるような目でぼくを見る。マミはただ安心してぼくを見ているのだろうが、ぼくは、マミが「あなたの子を産むためにこんなに苦しんでるんだよ」と訴えているような気がして、何も出来なくて申し訳ないような、ありがたいような感情を覚えた。

PM 3:30 硬膜外麻酔

陣痛の合間にマミが言った。

「やっぱ麻酔打とうかな。。」

マミの意識は朦朧としているだろうから、うかつには判断できない。しかし、2 度ほど確

認しても、「麻酔をする。早く通訳して」という。このときは、せっかくここまでがんばったのに、という気持ちもあったが、別に硬膜外麻酔をしてデメリットがあるというわけではない（ごく小さい危険性はあるが）。看護婦のアイリスに「麻酔にしてくれ」と通訳しよう。

と思ったが、この正念場に「硬膜外麻酔」という英単語が浮かんでこない。おろおろしつつ、「あれ、硬膜外麻酔ってなんていうんだっけ？」と発声しつつ電子辞書を探す。すると、陣痛が始まって苦しんでいるマミが、大声で「エピっ…」と叫ぶ。そうだ。「エピデュアル」だ。

アイリスが麻酔医に電話し、また、事の重要性に鑑みてきよさんを通訳として呼ぶ。その間、誓約書を持ってきて、サインを求められる。この緊急時に、官僚の哀しい性か、ぼくはその文章をきちんと解析し始める。

すると、横から、陣痛に苦しむマミが、「いいから早くっ！！」

自分を反省する。確かに、そこには恐ろしげなことが書いてある。下半身が動かなくなるかもしれない、とか、感染が起こるかもしれない、とか。しかし、この緊急時、決めた以上、サインするしかない。ぼくはその文章を詰めて、「いや、ここは承諾できない」とか「この文章はこう変えてくれ」とか言うつもりだったのか。

体全体が小刻みに震え、髪もぼさぼさのマミにペンを持たせ、サインさせる。字になっていないが、サインだし。いいや。

マミの決断から麻酔医が来るまで、それでも20分もかかった。その間、単純計算で陣痛の波は10回も来ているのだ。

3時50分、麻酔医がてきばきと仕事を始める。きよさんも来てくれているので、マミにハリス式流のゆっくり呼吸を指導してくれる。麻酔医は、マミの背中側にいた義母に「見られたくないから向こうに行ってくれ」という。マタニティークラスのときビデオで見たが、針を刺すと黄色い髄液が流れ出るようだ。義母がみたら卒倒しちゃうかもしれない。

ぼくはマミの前にかがみ、マミを支えた。陣痛の痛みと麻酔の注射の痛み（ちなみに、ぼくもひざの手術のときに骨髄への麻酔注射を経験したが、これはかなりえぐい。）の双方を耐えるマミは、ぼくの右腕をつかみ、いや、つかみやすいように肉を薄くつかみ直した上で、力いっぱい握り締める。本気で肉が切れるかと思ったが、ここでぼくが動いては、大変なことになる。マミもこれだけの痛み（ってもどれだけかぼくには哀しいことにわからない）に耐えているのだから、少しくらい肉が切れてもいいや、とそのときは本当に思った。（幸い、肉は切れずに、やや切り傷に近いミミズ腫れが4本ばかり残っただけだった。）

麻酔の効きを確かめたい麻酔医は、きよさんを通して、右左どっちに痛みがあるか、と質問する。このとき、驚いたことに、マミは英語で「both!」と答えた。後から聞くと、き

よさんを通しては、その分遅くなってしまうから、痛みから早く逃れたい一身上で英語が出てきたという。すごいじゃないか。

しかし、その1分後、やや麻酔が効き始めた後、再度同じ質問が。今度は右しか痛くなかったらしい。マミは「右！」と答える。おもしろいことに、「both」は出てきても、やや落ち着いた後では、「right」が出てこなかったらしい。。

PM 4:00 ひと時の休息

無事麻酔が効き始め、麻酔医は次の患者があるらしく、早々に去る。去り際、わが妻の危機を取り除いてくれたこの医者に対し、ぼくは心底から「Thank you very much…」と言った。振り返った麻酔医は、笑顔で「Oh, you're welcome. good luck!」といった。ちょっと感動的な風景だった。

マミも続いて「サンキューっ」。いつものマミの日本語的発音のサンキューである。だいぶ正気が回復してきたらしい。

4時10分、マミは下半身が麻痺してくるので、尿道官をつける。これで一段落した。麻酔医によると、出産は2時間後に、ということだ。ドクタールーが5時半過ぎに来るから、ちょうどいい。それまで1時間半、ひと時の休息だ。

マミも寝た。ぼくと義母もソファに座ると、自然に眠りに入っていった。

5時過ぎに目が覚めた。目が覚めると、マミはふつーだ。陣痛が来ると、小さな痛みは感じるらしいが、ふつーに会話できる。

「あの痛みは絶対耐えられないよ」

「死ぬかと思ったね」

まだ出産は終わってない、というか始まってもないのに、3人の中には安堵感が充満した。

5時10分、これまでずっとマミを観てくれたアイリスが交代になった。「赤ちゃんはもうすぐよ、がんばってね」といって彼女は部屋を出ていった。

PM 6:00 ドクタールー&スーザン

いよいよ来た。看護婦さんは、もっとも熟練と思われる、スーザンになった。ルーが子宮口をはかる。そして、マミに Push するように言う。スーザンもしきりにマミを励ます。

しかし、一度だけそうした後、ルーとスーザンはふたりで会話を初めた。ふたりの関係は知らないが、みているとスーザン先生、ルーが生徒、というような感じに見えた。スーザンが「彼女の子宮口はもう十分開いてるわ」「あなたの思うようにしなさい」とルーに言っている。ルーは、やや保守的で、分娩はまだ無理だと判断しているように聞こえた。

ぼくの英語力のなさも手伝い、ふたりの会話は断片的にしか耳に入っていない。さらにその後ふたりは部屋の外に出てドアを閉め、話を始めた。このとき、まさか、帝王切開にもなるのか？と非常に不安になった。

PM 6:20 最後のドクタールー

ドクタールーとスーザンは、部屋を出たままなかなか戻ってこない。再び彼らが入ってくるまでの 20 分は、焦燥感と苛立ちで、非常に長く感じられた。

6 時 20 分、ふたりが部屋に戻ってくる。スーザンがマミの左側、ルーが股の間に陣取り、すぐいきみを始める。義母はマミの後ろに立ち、ぼくはマミの横に座って足を持ち、背中を支える。マミは、麻酔が効いているのでいきんでも痛みは感じないが、足は動くようで、上手にいきめていた。

スーザンが「Good woman! Good woman!」と上手にマミを励ましてくれた。

4, 5 回いきんだが、まったく出てくる様子はない。マミのお腹はまだぼっこりと膨らんでいて、膣のほうに頭が来ている感じはまったくない。両足ふとももは、いきみでぷるぷる震えている。無痛のため、痛みがない分、強力にいきんでいるのだろう。ほんとにこれが出てこれるのか？と不安になりつつも、マミを励まし続ける。

ドクタールーがバキューム用の機材を持ってくる。機材といっても、非常に小さいおもちゃのようなプラスチック製のものだ。15 センチくらいの棒の先に、直径 5 センチくらいのバキューム（使ったことはないが、トイレ掃除のやつみたいなものだ）が着いている。色は薄い紫色で、外観はアイケアで売っているおもちゃみたいだ。手元に電源のようなものがあつたので、電池かなにかの力でひっぱるのだろう。こんなもので赤ちゃんが引き出せるのか？と思ったが、この力は強力だった。

ルーがマミの膣内にバキュームを入れる。直径 5 センチのものがわが妻の膣に入れられるのを目の当たりにするのは複雑な心境だが、比較的すんなり入っていく。膣の外周りは血まみれだ。子宮口まではすぐ近くになっているようで、バキュームは 10 センチ弱のところまでしか入らない。

次の陣痛のとき、バキュームしながらマミがいきむ。マミがいきみ、ぼくと義母とスーザンとで励まし、ルーがひっぱる（ってもスイッチ押してるだけだが）。このときはまだ出てこない。「スポンッ」と大きな音を立て、バキュームだけが抜けてくる。血が飛び散る。床に飛んでいった血を看護婦さんがふき取る。

次の陣痛で再度バキューム。「push!! Push!!」とルー。「Great! Good woman! Good Woman!」とスーザン。「がんばれ、マミ!」と強く手を握り締めてぼく。「マミ、がんばれ!」と義母。

なんと頭が出てきた。ぼくは目の前で起こる出来事を、それを見ることのできないマミにすべて伝えるよう努めた。すごい光景だった。スーザンは、マミを励ましたながら、「私とおんなじ赤毛の子よ!!」（スーザンは、ぼくには金髪に見えたが、白人的には赤毛の部類なのだろう。）とマミに冗談を言う。赤ちゃんの毛が血まみれで赤いのだが、マミにはその冗談が通じなかったらしいので、ぼくが解説すると、マミが笑う。無痛分娩のおかげで結構余裕だ。

ここからはすぐだ。この子の頭は、かわいそうにバキュームにひっぱられて、右方向にとうもろこしのように伸びている。また、頭には、出産中に赤ちゃんの心音をチェックするために挿入された紐のようなコードがまきついていて、その先端が髪の毛に絡んでしまっている。

顔が出てくれば、すべてか出るまで一瞬だ。

PM 6:35 Welcome to the world!

2004年10月7日 18時35分（ロサンジェルス時間）

ぼくとマミの赤ちゃんが生まれた。

赤ちゃんは、この世界に出てきてすぐに大きな産声をあげて泣いている。ぼくはわが子がマミの胎内から出てくる過程、わが子がこの世に生まれ出る瞬間をすべて、しっかりと見ることができた。しかし、このときは、マミを励ますのが主だったため、この子にはあまり意識がいつてなかったかもしれない。ただ、なぜか、この子の目を見た。まだ体が半分腫のなかに埋もれている最中に、「マミに似て大きな眼だ。よかった。」と心の中で言っていた。

生まれたばかりの赤ん坊は、グロテスクなだけで、かわいいなんてもんじゃない、と聞いていたが、うちの子は特別なのか、この時点で既にとてもかわいかった。たぶん、すべての親がそう思うのだろう。

へその緒を切った。そのときは落ち着いていて、うまく切れた。ゴムチューブみたいで硬くてなかなか切れないと聞いていたが、比較的すんなり切れた。そんなに硬くはなかった気がする。

まだ茫然としている。ただ、人が生まれることのすごさを感じてはいたが、わが子の誕生の喜びとか、感動というのはまだ来ず、ただ、驚異と安堵だった。

どの時点だろう。やはり、来てしまった。ものすごい感動がこみ上げてきた。赤ちゃんが分娩台のすぐ横の baby warmer に移されて、スーザンに「come here daddy! 」といわれて、初めてまじまじとわが子の姿、思い切り産声を上げて、元気に手足を動かしている姿を見れたときだろうか。この子は生きている。生きることを今、初めて、一生懸命に感じているんだ、と。

「daddy」という言葉にも、刺激されてしまった。そう、ぼくはこの子の父親なんだ。

この時点では、こみ上げるこの気持ちなんなのか分析できなかつたし、する気も余裕もなかったが、後から考えると、これがまさに「感動」という言葉の指す感情だ。筆舌に尽くしがたい感情だった。

最初は、スーザンやルーの明るい歓迎ムードを壊しちゃいけない、とか、マミも義母も泣いていないのに、とかいろいろ考えてしまい、トイレに駆け込もうとしたり、外に出ようとしていたりして、挙動不審にうろうろした。が、再びスーザンに「daddy, come on! take a picture! 」といわれ、観念した。わが子の誕生に際して泣いて、なにが悪い。こんなに感動的な出来事など他にないではないか。自分の子供がマミの体内から出てきた。マミが 10 ヶ月間大事に体内で育てた子だ。その子がすべての体のパーツをいっちょまえに完備してここで泣いている。呼吸している。生きている。

涙がどんどん出てきた。たぶん、いや、間違いなく、この 29 年間で最も感動した瞬間だった。

傍らを見ると、マミも、義母も泣いていた。

やや落ち着きを取り戻して、自分の妻と自分の子に声をかけることが出来た。

「おつかれさま。ありがとう。」とマミに。

「この世界へようこそ。」とわが子に。